

特徴をよく捕えた説明, 染色体数, 成分, 分布, 興味ある話題などが書かれている. 種ごとの説明の前にそれらの種が含まれる属の特徴と種への検索表があり, 同様に幾つかの属の前に所属の科の特徴と検索表という組み立てになっている. 科の配列は田川・岩槻(1972)の分類系によっていて, いわゆるウラボシ科が細分されている. 上記のような各論が本書のほとんどを占めていて, 最初に38ページの総論がある. シダ植物は何かから始まり, 生活環・無融合生殖, 次いで孢子体・配偶体の説明で読者に必要な智識を述べ, 次いで多様性・種分化・系統・分類・分布など, 最後に植物と人間, 絶滅に瀕する種類などが述べられている. この途中に日本産の科の検索表がある. 内容豊富で簡明, 初心者にもわかりやすく, 上級者にも大いに役立つ書物である. (伊藤 洋)

□Camus J. M. (ed.): *The History of British Pteridology 1891-1991*. 127pp. 1991. British Pteridology Society, Special Bulletin. no. 4. £5.0.

全英シダ学協会は100年の歴史を経たが, その機会に100年を回顧する記念論文集を編んだ. とはいっても, 厳密に100年史を意図したものではなく, 自由に書かれたエッセイを混載した部分もある. プロローグとエピローグは詩の形でまとめられ, 全体がシダ植物と人々という部分と協会という部分に2大別されている. 最初の部分には10篇の論文が載せられ, 化石と実験解析という研究分野別のもの, シダのリストと図説の歴史, 景観とシダや保全に関するもの, 栽培の歴史とその典型例, それに純粋にシダ学に没頭した巨人 Holttum と, 植物学の専門教育を受け, それでいてロック歌手となり, そしてオシダ属の研究に大きな成果を上げている Fraser-Jenkins の自分史と, 多様な文章が連なる. Holttum 先生の遺稿はありし日の先生を偲ばせる良い文章である. また, 後半の3篇は全英シダ学協会の100年の歩み, 覚え書の紹介, 歴代会長や幹事長の紹介, それに26枚の歴史を物語る写真とで構成されており, これは綴られた資料篇とでもいうべきものである. 博物学の時代から現代まで, アマチュアも専門家も

一緒にシダ学を学び発展させている紳士の国の歩みが伺い知れる楽しい冊子である. 英語の文献が読めるアマチュアと, 該博な知識に裏づけられながら常に山野を跋渉することに楽しみを享受しようとする専門家が, 限られた数の自生のシダからどのように歓びを見出してきたのか, 植物と人とのちょっと良い関係を物語る冊子として, いろんな分野の人にお薦めしたい. (岩槻邦男)

□Holttum R. E.: *Flora Malesiana series II vol. 2. part 1. Tectaria Group* 132pp. 1991. Foundation Flora Malesiana. Rijksherbarium, Leiden.

Richard Eric Holttum 氏は, 1895年イギリスに生まれ, 1922~1954年の間シンガポール植物園を中心に, 後 Kew に戻られて主としてシダ植物やラン科の分類学的研究を続けてこられたが, 1990年9月に95才で亡くなられた. この Flora Malesiana のシリーズの1冊は氏の最後のまとまった論文で, これまで Blumea 等の雑誌に発表されてきた知見のうち, マレーシア地域のナナバケシダ *Tectaria* 類についてまとめたものであり, ナナバケシダ属やカツモウイノデ属 *Ctenitis* を含む11属が取り扱われている. このうち, 最も大きな属であるナナバケシダ属には105種が認められているが, 23種が新種であり, これらは新変種(9), 新組合せ(2)と共に *Blumea* 35: 347-557 (1991) に発表されている.

なお, これまでに出版されている Flora Malesiana series II, シダ植物にはヘゴ科, ウラジロ科, ミズニラ科, ホングウシダ科, ツルキジノオ科, フサシダ科, ヒメシダ科がある. (三木 栄二)

□Desikachary T. V., Krishnamurthy V. and Balakrishnan M. S.: *Rhodophyta* 277pp. + pls.1-12+279pp. + figs.1-51+pls.1-41. 1990. Madras Science Foundation, Madras. ¥10,000.

インド紅藻植物誌ともいうべき本で, 第1部総論(276頁), 第2部分類編(279頁)から成る. 総論は, 細胞構造, 体構造と生殖, 系統, 分類体系の4章より成り, 最も多く頁を割いた章は体構造と生殖に関するもので, 170頁が費される. 全